様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｈ０３３１６

研究課題名（和文）台湾政治体制移行期の民主進歩党：「改革型」民主化とナショナリズムの相克

研究課題名（英文）The Democratic Progressive Party in the Transitional Period: Contention between 'Reformist' Democratization and Nationalism

研究代表者
若林　正丈（WAKABAYASHI, Masahiro）

早稲田大学・政治経済学術院・教授

研究者番号：６０１１４７１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,900,000円

研究成果の概要（和文）：3年間の研究活動で、6名の聞き取り調査、5回のワークショップ、10回のミーティング、そして関連資料の収集・整理を行なった。その結果、台湾の民主化のプロセスの中で民主進歩党が果たした役割について改めて確認するとともに、同党が台湾ナショナリズム政党として成長したことにより、台湾の内政はアイデンティティをめぐる対立が恒常化し、民主主義の制度設計が不備なまま不安定な構造を内包した政党政治になった、という仮説の有効性が確認された。

研究成果の概要（英文）：In the past three years we conducted interviews, organized workshops, held meetings, and collected related materials. In the end, we had a renewed understanding of the role played by the Democratic Progressive Party in the transitional period in Taiwan. We also reached conclusion that our hypothesis on the course of development of the Democratic Progressive Party has been affirmed. As the DPP grew up as the party of the Taiwanese nationalism, the confrontation of identities became an everlasting characteristic of the Taiwanese politics. It lacked an adequate design for democratic institutions, and the structure of Taiwanese party politics contained unstabilizing elements within.

研究分野：台湾政治

キーワード：政治学　比較政治　台湾政治

１．研究開始当初の背景

台湾が国民党一党支配の権威主義体制下にあった 1986 年、台湾ナショナリズムを掲げる反対政党として民進党が誕生した。これを契機に台湾の政治体制は民主体制への移行期に入り、1996 年の総統直接選挙の実施をもって移行段階を完了した。研究代表者・若林は『台湾―分裂国家と民主化』（東京大学出版会、1992 年、サントリー学芸賞受賞）において、国民党政権の権威主義体制としての性格を明らかにした上で、台湾の民主化の特徴を描き出した。若林はまた『台湾の政治―中華民国台湾化の政治史』（東京大学出版会、2008 年、アジア・太平洋賞大賞、樫山純三賞受賞）で、1970 年代以降の政治構造変動の「初期条件」論（戦後台湾国家の三重の性格：東西冷戦の前哨基地、中国国家体制、遷占者国家）と「七二年体制」論（台湾の扱いに関する一種の国際的アレンジメント、1972 年の米中共同声明と日中共同声明に代表される）を提起し、民主化後の台湾の政党システムのイデオロギー的性格を分析した。

両研究を通じて明らかにされたのは次のようなことである。1990 年代初頭、台湾の内政における政治的対立軸は民主化をめぐるものであったが、民主化後には「台湾ナショナリズム対中国ナショナリズム」をイデオロギー的対抗軸とする「ナショナリズム政党制」が成立した。2000 年の民進党の政権獲得後この特徴が顕著になった。他方、国際政治では、台湾の位置を定めた「七二年体制」が依然として台湾社会の選択の範囲を規定している。そのため、台湾ナショナリズムの台頭により台湾が「一つの中国」原則から離れようとすると台湾の内外で軋轢が生じ、台湾の内政の動向が東アジアの安定を左右することにもつながった。台湾の内政に経常的に干渉することのなかった中国が、1990 年代初頭には直接的なプレイヤーとして現れたことは周知のことである。つまり、台湾の内部の論理に基づき台湾ナショナリズム政党が登場し成長したことが、国際政治上大きな意味を持つことになったのである。

上記の研究を含めて、台湾内外で台湾の民主化に関する研究成果が蓄積され、民進党の民主化要求政党としての側面には理解が深まっているが、「七二年体制」への挑戦を志向する政党が、台湾でなぜ、どのように誕生し、成長したのかという問題の解明は、これまで十分なされていなかった。そこで、研究代表者は 2012 年度より基盤研究（B）「台湾政治における反対党の誕生：国際体制・孤立国家・市民社会とナショナリズム」において、グローバルな環境の中で分類不能の例外的存在とされた台湾国家の位置が台湾社会に与えたインパクトに注目した国際社会学者・汪宏倫の視点（Wang Horn-luen, “In Want of a Nation: State, Institutions and Globalization in Taiwan,” Ph.D.thesis, Chicago University, 1999）を取り入れて、国際体制・戦後台湾国家・台湾社会の重層的連動を重視する国際政治社会学的視点から、民進党が結成される以前の「党外」運動の形成過程とその特質を分析した。

この研究により、第 1 に、台湾は世界経済での地位を上昇させながらも、「七二年体制」の下で主要国との外交関係を失い、「繁栄する孤立国家」というディレンマを抱え込んだこと、第 2 に、台湾社会がこのディレンマに対して応答する中から、自由・民主・人権の普遍的国際的価値にコミットしつつ、同時に「一つの中国」原則を執行する国際体制に反発する台湾ナショナリズム政党（民進党）が生まれたこと、が示された。特に、「党外」運動の指導者であった康寧祥の発言・行動を分析することにより、台湾ナショナリズム的言説が早い段階で台湾人の聴衆を引きつける要因となっていたこと、康の選挙集会のスタイルがその後の民進党の選挙演説・大衆動員の雛形となり民進党を牽引したことが明らかになった。また、関係者の聞き取り調査を進めたことで、台湾各地の「党外」の活動家らが組織化とは言えないまでも一定の連絡・連携をとれる状況になっていたことが確認できた。これにより民進党が誕生する以前のプロセスをめぐる諸問題はかなりの程度解明することができた。

次に取り組むべき課題は、民進党が、民主化の過程でどのように成長し、どのような役割を果たし、そしてどのような限界に突き当たったのかという問題の解明である。

２．研究の目的

本研究は、台湾の民主化のプロセスの中で民進党が果たした役割、およびその現実的・イデオロギー的制約に焦点を合わせ、政治体制移行期（1986-96 年）の 10 年間における台湾政党政治の形成過程の特質を明らかにするものである。台湾の民主化が国民党主導の「改革型」で進展し、「一つの中国」原則に挑戦する台湾ナショナリズムが登場してきたのであるが、この台湾政治体制移行期における「改革型」民主化とナショナリズムの相克が民進党の発展を促し、また制約していく要因となっていくのである。

本研究では、①民進党が地方での統治実績を足掛かりに主要野党へと成長したことで政権交代を可能にする二大政党型の民主政治の基礎が築かれた。②その一方、民進党が「一つの中国」原則に挑戦する台湾ナショナリズム政党として成長したことにより、台湾の内政はアイデンティティをめぐる対立が恒常化し、民主主義の制度設計が不備なまま不安定な構造を内包した政党政治になった、という仮説の検証を試みる。

３．研究の方法

(1) 概括

3 年間に以下の活動を並行的に進行させる。①資料収集：先行研究の不足を補うため台湾に出張し聞き取り調査を実施する。散逸している当時の新聞の切り抜き、民進党の選挙ビラ・パンフレットなどを収集し電子化する。②資料分析：民進党関係者の聞き取り調査の記録と収集した一次資料の解読を進め、二次文献と合わせてそれぞれの資料の意義を明確にしていく。
③アプローチの強化と研究の統合：研究組織メンバーによる勉強会、専門家を招聘してのワークショップで研究アプローチを強化すると共に、メンバーの研究を統合していく。

(2) 平成 27 年度

研究初年度にあたる。5 月 22 日、ミーティングを開催、全体の活動計画を確認した。また、メンバーの研究進捗状況を共有するため勉強会を開催し研究協力者の田上智宣が報告し、その検討を行った。7 月 10 日、早稲田大学台湾研究所と合同のワークショップを開催し、研究分担者の小笠原欣幸が「1996 年総統選挙の再検討―台湾アイデンティティの起点」と題する報告を行った。9 月 19 日、勉強会を開催し、研究分担者の家永真幸が「台湾政治体制移行期の李登輝副総統―『見証台湾』を読む」と題する報告を行った。

11 月 26-30 日には研究グループ全体で台湾に出張し、民進党の結党前後のいきさつを知る張茂桂氏と彭明敏氏に長時間の聞き取り調査を行なった。これにより、過去の文献にはない新たな知見が得られた。12 月 27 日、台湾大学の王業立教授を招聘しワークショップを開催した。王教授は台湾政党政治研究の第一人者であり、本研究をまとめるうえで有益なアプローチ・視点を提供してくれた。

また、研究メンバーが収集した一次資料・二次資料、および、聞き取り調査の記録を研究補助要員がデジタル資料として整理した。

(3) 平成 28 年度

研究第二年度にあたる。5 月 22 日にミーティングを開催し、活動計画について確認した。合わせてワークショップを開催し、台湾から招聘した中央研究院の林泉忠研究員が「香港・台湾の政党の発展の共通点と相違点」と題し講演を行ない、全体で議論を行なった。林氏は台湾政治・アイデンティティ研究の第一人者であり、本研究をまとめるうえで有益なアプローチ・視点を提供してくれた。

9 月 9 日、ミーティング兼勉強会を開催し、研究分担者の家永真幸が「廖為民『我的党外青春』を読む―人的ネットワークを中心に」、同田上智宣が「胡佛の来歴・業績紹介」と題する報告を行ない、台湾での聞き取り調査の準備を進めた。

11 月 2-6 日には研究グループ全体で台湾に出張し、政治体制移行期の経緯に詳しい胡佛氏、李登輝氏、廖為民氏に長時間の聞き取り調査を行なった。これにより、過去の文献にはない新たな知見が得られた。

12 月 28 日、ワークショップを開催し研究組織として研究の進展状況を確認し、研究メンバーの研究内容について包括的に議論した。また、研究メンバーが収集した一次資料・二次資料、聞き取り調査の記録を研究補助要員がデジタル資料として整理した。

(4) 平成 29 年度

最終年度にあたるので研究の推進と同時に成果発表の準備に力を注いだ。5 月 28 日にミーティングを開催、活動計画を議論し、成果発表シンポジウムの 11 月開催とその概要を決定した。合わせて勉強会を開催し、各自の研究進展状況について報告した。

シンポジウム開催に向け、各自が分担の研究を進めた。台湾の研究の最新状況については資料を入手し研究グループ内で共有し、研究補助要員がデジタル資料として整理した。

10 月 8 日、ミーティング兼勉強会を開催し、研究代表者の若林正丈が「オポジションから入る―戒厳令下台湾政治研究事始め」と題する報告を行ない、これまでの研究のプロセスと方法論について総合的な議論を行なった。

11 月 18 日、「台湾政党政治の始動―オポジションと党国体制」と題するシンポジウムを早稲田大学で開催した。コメンテータとして台湾からこの分野の第一人者である薛化元氏と林泉忠氏を招聘し議論に参加してもらった。会場で報告レジュメ集を配布した。

４．研究成果

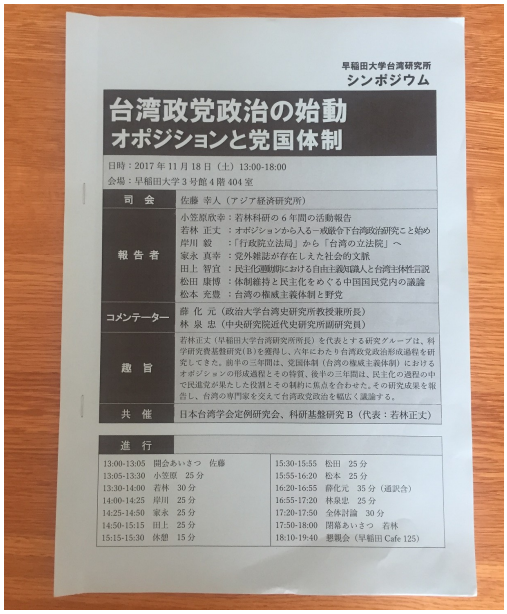
前述のように 3 年間の研究活動で、6 名の聞き取り調査、5 回のワークショップ、10 回のミーティング、成果報告のシンポジウム、そして関連資料の収集・整理・検討を行なった。聞き取り調査では、既存の文献にはない新たな知見が得られた。ワークショップでは、過去の研究の定説を整理し方法論の議論を深めることができた。これらを通じて、台湾政治体制移行期における「改革型」民主化とナショナリズムの相克が民進党にとっての発展と制約の要因となっていくプロセスと構造を、国際体制・戦後台湾国家・台湾社会の重層的連動を重視する視点から分析することができた。

これらの分析を踏まえ、①民進党が主要野党へと成長したことで政権交代を可能にする二大政党型の民主政治の基礎が築かれた。②その一方、民進党が台湾ナショナリズム政党として成長したことにより、台湾の内政はアイデンティティをめぐる対立が恒常化し、民主主義の制度設計が不備なまま不安定な構造を内包した政党政治になった、との仮説の有効性が確認されたと評価した。

3 年間の成果として、11 月 18 日、「台湾政党政治の始動―オポジションと党国体制」と題するシンポジウムを早稲田大学で開催し

た。このシンポジウムは、研究成果を広く共有するために日本台湾学会定例研究会および早稲田大学台湾研究所との共催とした。専門的なテーマであるにもかかわらず約 70 名の参加者があり、関心の高さがうかがえた。当日、43 頁の報告レジュメ集を配布した（写真参照）。

加えて、研究期間内に間に合わなかったが、取り調査の記録、および、研究成果を発展させた共著を刊行する予定である。取り調査の記録については、平成 30 年度に東京大学東洋文化研究所から刊行されることが決まっている。これらの刊行物は日本における台湾政党政治史研究に寄与するであろう。



早稲田大学台湾研究所
シンポジウム

台湾政党政治の始動
オポジションと党国体制

日時：2017 年 11 月 18 日（土）13:00-18:00
会場：早稲田大学 3 号館 4 階 404 室

司　会	佐藤 幸人（アジア経済研究所）
報告者	小笠原欣幸：若林科研の 6 年間の活動報告 若林 正丈 ：オポジションから入る―戒厳令下台湾政治研究こと始め 岸川 毅 ：「行政院立法局」から「台湾の立法院」へ 家永 真幸 ：党外雑誌が存在しえた社会的文脈 田上 智宜 ：民主化運動期における自由主義知識人と台湾主体性言説 松田 康博 ：体制維持と民主化をめぐる中国国民党内の議論 松本 充豊 ：台湾の権威主義体制と野党
コメンテーター	薛 化 元（政治大学台湾史研究所教授兼所長） 林 泉 忠（中央研究院近代史研究所副研究員）
趣　旨	若林正丈（早稲田大学台湾研究所所長）を代表とする研究グループは、科学研究費基盤研究（B）を獲得し、六年にわたり台湾政党政治形成過程を研究してきた。前半の三年間は、党国体制（台湾の権威主義体制）におけるオポジションの形成過程とその特質、後半の三年間は、民主化の過程の中で民進党が果たした役割とその制約に焦点を合わせた。その研究成果を報告し、台湾の専門家を交えて台湾政党政治を幅広く議論する。
共　催	日本台湾学会定例研究会、科研基盤研究 B（代表：若林正丈）

進　行

13:00-13:05　開会あいさつ　佐藤	15:30-15:55　松田　25 分
13:05-13:30　小笠原　25 分	15:55-16:20　松本　25 分
13:30-14:00　若林　30 分	16:20-16:55　薛化元　35 分（通訳含）
14:00-14:25　岸川　25 分	16:55-17:20　林泉忠　25 分
14:25-14:50　家永　25 分	17:20-17:50　全体討論　30 分
14:50-15:15　田上　25 分	17:50-18:00　閉幕あいさつ　若林
15:15-15:30　休憩　15 分	18:10-19:40　懇親会（早稲田 Cafe 125）

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 8 件）

①松本　充豊、中国国民党の党主席選挙に関する一考察、交流、査読無、No. 919、2017、1-11

②家永　真幸、「党外雑誌」読者から見た台湾の民主化―廖為民『我的党外青春』を読む、東京医科歯科大学教養部紀要、査読無、No. 47、2017、71-76

③若林　正丈、台湾の「渦巻選挙」と非承認国家民主体制の苦悩、ワセダアジアレビュー、査読無、No. 18、2016、42-62

④岸川　毅、台湾省議会とオポジションの形成―党外議員の行動と戦略―、日本台湾学会報、査読有、No. 18、2016、42-62

⑤小笠原　欣幸、2016 年台湾大選分析、台湾研究（中国社会科学院台湾研究所）、査読無、No. 254、2016、1-20

⑥松本　充豊、民主化後の政党政治―2016 年選挙から展望される可能性、アジア遊学、査読有、No. 18、2016、42-62

⑦家永　真幸、台湾政治体制移行期の李登輝副総統―『見証台湾』を読む、東京医科歯科大学教養部紀要、査読無、No. 46、2016、83-89

⑧若林　正丈、「辺境東アジア」政治のアカウンタビリティー問題－2014 年の台湾、香港、沖縄、国際問題、査読無、No. 643、2015、1-6

〔学会発表〕（計 13 件）

①若林　正丈、「帝國」的「網子」與「鑿子」―思考「台灣來歷」的複合性視角、台湾師範大学台湾史研究所、2018 年 3 月 16 日、台湾師範大学

②田上　智宜、民主化期における市民権制度の台湾化、日本台湾学会関西部会研究大会、2017 年 12 月 16 日、京都光華女子大学

③若林　正丈、オポジションから入る―戒厳令下台湾政治研究こと始め、日本台湾学会、2017 年 11 月 18 日、早稲田大学

④松田　康博、体制維持と民主化をめぐる中国国民党内の議論、日本台湾学会、2017 年 11 月 18 日、早稲田大学

⑤岸川　毅、「行政院立法局」から「台湾の立法院」へ、日本台湾学会、2017 年 11 月 18 日、早稲田大学

⑥小笠原　欣幸、若林科研の 6 年間の活動報告、日本台湾学会、2017 年 11 月 18 日、早稲田大学

⑦松本　充豊、台湾の権威主義体制と野党、日本台湾学会、2017 年 11 月 18 日、早稲田大学

⑧家永　真幸、党外雑誌が存在しえた社会的文脈（1975-86 年）、日本台湾学会、2017 年 11 月 18 日、早稲田大学

⑨田上　智宜、民主化運動期における自由主義知識人と台湾主体性言説、日本台湾学会、2017 年 11 月 18 日、早稲田大学

⑩家永　真幸、台湾の民主化過程における雑誌メディアの役割―廖為民『我的党外青春』を中心に、現代中国学会、2016 年 10 月 30 日、慶應義塾大学

⑪若林　正丈、The Baton Relay of Taiwanese

History: the Frontier-Dynamism of Empires and the Paradoxical Formation of a Nation-State、Rule of Law and Democracy in East Asia、2016 年 6 月 24 日、東京大学

⑫松田　康博、戰後威權主義對台灣社會的影響、鄭南榕與言論自由学術研討会、2016 年 4 月 6 日、台湾大学

⑬若林　正丈、台湾におけるナショナリズム政治の現在―台湾ナショナリズム再考、日本国際政治学会、2015 年 10 月 31 日、東北大学

〔図書〕（計１件）

①松田　康博　他、晃洋書房、現代台湾の政治経済と中台関係、2017、228

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

早稲田大学台湾研究所 URL
http://www.waseda.jp/prj-taiwan/gaiyou.html

６．研究組織
(1)研究代表者
若林　正丈（WAKABAYASHI, Masahiro）
早稲田大学・政治経済学術院・教授
研究者番号：６０１１４７１６

(2)研究分担者
岸川　毅（KISHIKAWA, Takeshi）
上智大学・総合グローバル学部・教授
研究者番号：６０２８６７５５

松田　康博（MATSUDA, Yasuhiro）
東京大学・東洋文化研究所・教授
研究者番号：５０５１１４８２

小笠原　欣幸（OGASAWARA, Yoshiyuki）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授
研究者番号：２０２３３３９８

松本　充豊（MATSUMOTO, Mitsutoyo）
京都女子大学・現代社会学部・教授
研究者番号：００３３５４１５

佐藤　幸人（SATO, Yukihito）
独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所・新領域研究センター・研究センター長
研究者番号：９０４５０４６０

家永　真幸（IENAGA, Masaki）
東京医科歯科大学・教養部・准教授
研究者番号：９０６３２３８１

星　純子（Hoshi, Junko）
茨城大学・人文学部・准教授
研究者番号：４０５９８６４５

田上　智宜（TANOUE, Tomoyoshi）
大阪大学・言語文化研究科・特任助教
研究者番号：２０７７４５６６

(3)連携研究者
（　　）
研究者番号：

(4)研究協力者
薛　化元（HSUEH, Hua-Yuan）
政治大学・台湾史研究所・教授

林 泉忠（LIM, John Chuan-tiong）
中央研究院・近代史研究所・副研究員